

対話的な学習活動を通して「参照する力」を育てる 国語科授業の創造

—「情報の扱い方」に着目して—

森田香緒里・飯田 和明・見目 真理・綱川 真人・古西はるか
牧野 高明・芳田 潤・渡邊留美子

対話的な学習活動を通して「参照する力」を育てる 国語科授業の創造[†]

—「情報の扱い方」に着目して—

森田香緒里*・飯田 和明**・見目 真理***・綱川 真人***・古西はるか***

牧野 高明****・芳田 潤****・渡邊留美子****

宇都宮大学共同教育学部*

元宇都宮大学共同教育学部**

宇都宮大学共同教育学部附属小学校***

宇都宮大学共同教育学部附属中学校****

本稿は宇都宮大学共同教育学部と附属学校園との連携研究プロジェクトの一つである、国語科プロジェクトの4年間の実践研究の成果と課題を報告するものである。本プロジェクトでは、小中学校の9年間で育成すべき言葉の力を「参照力」に焦点化し、4年間にわたって実践研究を行った。「参照力」育成の場として「情報の扱い方に関する事項」に着目したことで、国語科における「情報の扱い方」についての具体的な学習内容を提示することができた。特に「操作的な見方・考え方」という概念を提案したことは、各教科におけるICT活用が進みつつある現状において、国語科が育成すべき言葉の力の方向性を示したと言える。

キーワード：参照力、情報の扱い方に関する事項、対話的な学習活動

1. 国語科プロジェクトが目指す「参照力」

1-1. 連携研究プロジェクトについて

宇都宮大学共同教育学部の附属学校園では、地域・

社会の教育研究、教員養成・研修等の機能強化を目指す、2018年より大学教員と附属学校園教員による連携研究を行っている。そのために「12年間の学びの連続性を考えた単元・授業づくり」「大学教員の知見を生かした授業実践・分析・評価」の2点を方策とし、各教科等の研究部会として13のプロジェクトを組織している¹。本稿はそのうちの一つである国語科プロジェクトの取り組みの概要を述べ、4年間の成果と課題について報告するものである。

1-2. 「参照力」とは

国語科プロジェクトでは、小中学校の9年間で育成すべき言葉の力を「参照力」に焦点化し、4年間にわたって実践研究を行ってきた。国語科プロジェクトが掲げる「参照力」とは、「他者の言説や情報を引き合いに出しながら、自分の考えを深め表現する力」のことである（図1：「参照力」のイメージ）。辞書的な意味の「参照」とは異なり、海外の国語教育で扱われている概念を参考に、規約的に広く定義したものである。

[†] Kaori MORITA*, Kazuaki IIDA**, Mari KEMMOKU***, Manato TSUNAGAWA***, Haruka KONISHI***, Takaaki MAKINO****, Jun YOSHIDA**** and Rumiko WATANABE****: Development of Japanese language classes for 'referencing' (ability to refer) and information literacy through interactive learning

Keywords: ability to refer, interactive learning, information literacy

* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

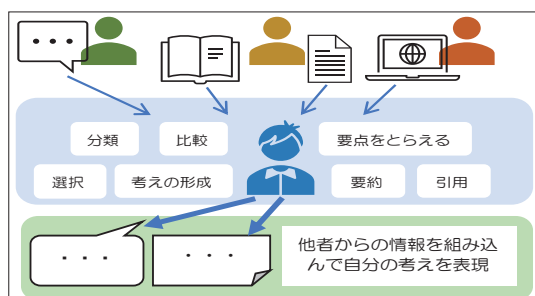
** Former Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

*** Elementary School attached to the Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

**** Junior High School attached to the Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

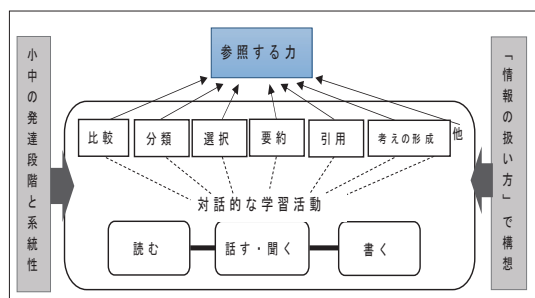
(連絡先:kaorin@cc.utsunomiya-u.ac.jp 著者1)

図1：「参照する力」のイメージ



教室での一人一台端末使用が前提となり、ICTを活用した言語活動が国語科においても促進されつつある。児童生徒はこれまで以上に容易に多くの情報にあたって探索でき、また双方向のやりとりが可能になった。そうした学習環境における読み書き行為を考えた時、今後より一層必要になってくる言葉の力は、多くの情報を理解した上で適切に選び取り、活用しながら、自身の目的にかなうよう表現していくことである。「参照力」は、まさにこうした言葉の力を志向するものであり、主体的な読み書きや考えの形成に結びつく力である。

図2：研究テーマのレイアウト



もちろんこうした力はこれまでも議論されてきたが、平成29年版学習指導要領で「情報の扱い方に関する事項」が新設されたように、読解や活用の対象となる情報を操作的に扱うような見方・考え方を養うことがより重要となる。本プロジェクトでは、こうしたデジタル社会に求められる読み書き能力を「参照力」と設定し、その力を構成する具体的で要素的な技能を抽出した。また、発達段階によるそれらの順序性などについても検討した。授業構想にあたっては、参照力との関連性の高い「情報の扱い方に関する事項」（知識及び技能）に着目し、研究・実践の範囲を設定した（図2：研究テーマのレイアウト）。

参照力を育成するにあたり、本プロジェクトでは対話的な学習活動を設定し授業づくりを行ってきた。情報に含まれる操作的な見方や考え方は、他者と交流し相対化することで明瞭になると考えたからである。小学校では単元において扱う「情報」とは何かについて具体的に定め、それを扱うことが必然になるようなワークシートや学習活動を設定することに重点をあてて研究を行った。中学校では、「情報と情報との関係」の具体化や、対話的な活動における情報の扱い方についての方法知の共有の仕方についての研究を中心に行った。

1－3. 「参照力」育成のための学びの道筋

国語科プロジェクトでは、参照力をつけるための9年間の学びの道筋について、子どもの発達段階を考慮し表1のように設定した。これは、「情報の扱い方に関する事項」の内容を視野に入れながら、「参照」に関わる諸技能を段階的・系統的に扱えるよう意図したものである。各段階には「操作的な見方や

表1：国語プロジェクトが目指す段階的な学びの姿

小学校	中学校
<p>【第1段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報を理解し、共通点や相違点を考える。 ・情報の順序について理解する。 <p>【第2段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報を比較し分類する。 ・自分の考えや表現に必要な情報を選択する。 <p>【第3段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報と情報とのつながりや関係をとらえる。 ・自分の表現や目的に応じた情報の組み込み方を理解する。 	<p>【第1段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意見と根拠を区別してとらえる。 ・情報を比較し分類する。 <p>【第2段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報と情報との様々な関係をとらえる。 ・効果的な表現を想定し、情報と自分の表現との関連性を吟味する。 <p>【第3段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報の信頼性の確かめ方について理解する。 ・情報を適切に示しながら、論理的に自分の考えを展開する。

考え方」に関わる認知的側面と、具体的な言語活動の側面とが含まれている。各段階で参照力を育成するというよりも、9年間を通して段階的に育成するよう配置している。

ただし、言葉の力の習得には反復性や他の諸能力との関連性が認められるため、表1においてもその点を反映させている。また、子どもの実態や学級の実態に応じて授業構想を行い、表1の内容を検証してきた。研究を重ねていく中で、実際の子どもの姿から段階性の再検討も行っている。

以下、小学校における実践と中学校における実践を1例ずつ取り上げ、本プロジェクトの成果の一端を述べる²。

2. 「参照力」育成のための授業実践

2-1. 情報を比較・分類し、選択する（小学校）

他者の言説や情報を適切に選び取り自身の表現に組み込んで展開していくためには、まず情報をその内容や機能などのまとまりによってとらえることが必要になる。小学校段階においては、まず情報がどのような順序で配列されているのかについて理解したり、共通点・相違点で捉え分類したりする活動を基礎的な段階として設定した。その上で、情報を比較したり分類したりして、自分の考えや表現に必要なものを選択するという段階を想定した。ここでとりあげる授業実践は、表1の「小学校第2段階」を想定したもので、情報を比較・分類し選択する力を「書くこと」の領域で育成することをねらいとしたものである。

【授業実践の概要（小学校第3学年）】

- (1)単元名：AとB、あなたはどっち！？ 附小なるほどアドバイザーになろう
- (2)単元の目標：さまざまな生活場面で「二つのうちどちらを選ぶか」迷っている友達にアドバイスするために、相手が納得する理由を選んで短い意見文を書くことができる。
- (3)主な対話的言語活動：「二つのうちどちらを選ぶかで迷っている友達に意見文を書いてアドバイスする」という目的を意識し、友達と相談しながら、相手が納得するような理由を比較したり選択したりする。
- (4)単元展開（8時間）：
 - ・アドバイスが必要な話題について考える。
 - ・話題を決めて意見を考え、それを支える理由

を集める。

- ・友達同士で理由を比較し、相手が納得するような理由を選んでアドバイス文を書く。

【実践の成果と課題】

本単元では、生活場面で迷いがちな話題を選び、「なるほどアドバイザー」になって意見文の形で応えるという設定をした。この設定により児童の学習意欲が高まり、アドバイス（自分の意見）のために挙げた複数の理由の中から相手に納得してもらえるものを選ぶ、という「情報」の操作・活用につなげることができた。

図3のワークシートは、自分や友達の挙げた複数の理由を「なるほど」「いまいち」といった観点から評価し、より「なるほど」と思える理由を選ぶというものである。意見を支えている複数の理由を本単元における「情報」として扱い、「なるほど」「いまいち」といった観点で序列化していくことで、説得力の度合いを考える活動である。また話し合いなどの対話的な活動を繰り返しながら、目的をもって理由の序列について検討することで、比較の観点を形成し分類の意識を育むことができた。

図3：説得力のある理由を選ぶためのワークシート

2-2. 情報を適切に組み込んで表現する（中学校）

中学校の特に第3学年では、「参照力」が身についた姿を想定し単元を設定した。ここでとりあげる授業実践は表1の「中学校第3段階」を想定したもので、「書くこと」の領域において、情報を適切に示しながら論理的に自分の考えを展開することをねらいとしたものである。

本プロジェクトが目指す「参照」は、ただ情報にあたって確認することではなく、自分の表現に他者からの情報を適切に組み込むことを想定している。

そのためには、情報を選びとるだけでなく、正確に引用したり、適切に組み込んだりするための方法も理解する必要がある。本実践では、「答辞を書く」という中学3年生の学校生活に即した学習活動を設定し、感謝の気持ちを伝えるという明確な目的を持たせ、文種にふさわしい情報を選んで組み込むという言語活動を設定した。

【授業実践の概要（中学校第3学年）】

(1)題材名：答辞を書く（書くこと）

(2)題材の目標：

- 具体と抽象など、情報と情報との関係について理解を深めることができる。
- 論理展開を考え、文章の構成を工夫することができる。
- 目的や意図に応じて表現を考えたり情報を適切に引用したりして、自分の考えが伝わるよう工夫することができる。

(3)主な対話的言語活動：卒業式に読む答辞を書くために、答辞に必要な情報や適切な引用の仕方について話し合う。また、各自が書いた答辞を読み合って意見を交換し、必要な修正を行う。

(4)単元展開（4時間）：

- ・答辞にふさわしい情報を理解する。
- ・答辞に用いる情報を集める。
- ・引用する情報を考え、目的や相手、場面に合った内容を吟味する。
- ・答辞を書き、友達と読み合う。

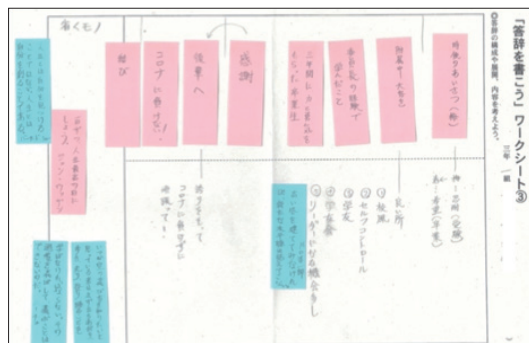
【実践の成果と課題】

中学校では、「参照力」が身についた姿として「卒業式の答辞を書く」活動を想定し、答辞にふさわしい情報の選択や構成について考えた。この場合の「情報の扱い方」は、感謝など自分の伝えたい内容について抽象と具体のバランスをとること、また本や逸話など他者の言説から答辞に適切なものを引用して組み込むことなどが含まれる。

図4のワークシートでは、答辞で表現する自分の思いとそれを支える具体的な内容や他者からの引用などを、付箋を使って配列するものとなっている。答辞に組み込むべき情報を、付箋を使って配列すること、そしてそれをグループで検討し付箋を並べかえることで、「操作的な見方・考え方」を相対的に自覚できることをねらいとした。グループでの付箋の並べ替え活動を通して、内容を深めるだけでなく構成を考えることも意図した。そして実際に答辞を

書く際には、よりよい引用の方法などについても意識させ、情報の組み込み方を具体的に学びながら、論理的で目的の明確な参照になるよう工夫した。こうした手立てにより、複数の異なる情報を目的に応じて選択し、組み込んで表現するという「参照力」の具体的な姿に迫ることができた。

図4：答辞の構成を考えるためのワークシート



3. 4年間の研究成果と今後の課題

本プロジェクトの全体的な成果としては、小学校と中学校が合同でお互いの学習指導案等の検討を行ったことにより、言葉の発達や学びの段階性を意識した授業構想ができた点にある。各段階における学びがどのように累積され、またどのように発展させていくかを意識することで、重点をおくべき力や学習活動がより明瞭になった。

また、「参照力」育成の場として「情報の扱い方に関する事項」に着目したことで、国語科における「情報」とは何か、「情報の扱い方」とは何かについて、具体的な学習内容として提示することができた。特に「操作的な見方・考え方」という概念を提案したことは、各教科におけるICT活用が進みつつある現状において、国語科が育成すべき言葉の力の方向性を示したと言える。

以下、小学校・中学校それぞれにおける成果について述べる。

小学校では、主体的で必然性のある情報活用を目指した単元づくりを行ってきた。共通の学習活動の設定や言語活動の例示を組み合わせることで、単元を展開することが、主体的な情報活用を促す上で高い効果があり、有効であることが明らかになった。表現方法が明確な言語活動を設定し子どもに例示することで、教師も子どもも単元を見通し、進度を調節しな

がら取り組むことができた。また、共通課題に取り組む場があることで、子どもたちは単元における「操作的な見方・考え方」の具体を体験しながら理解することができた。教師にとっても、子どもたちの「操作的な見方・考え方」の理解を深める関わりをすることができたり、困難を抱く子どもへの支援の必要性を予測しながら、自力解決の場において個別の対応をしたりすることができた。

中学校においては、特に「情報と情報との関係」を明確化した授業実践を蓄積できた点が成果としてあげられる。読むことの領域においては、他者からの情報や言説を、複数の異なる情報の意図的な配列として捉えるような学習活動を設定した。また書くことや話すこと聞くことの領域においては、複数の情報を比較・選択し自分の表現に組み込むことを意識した学習活動を設定した。いずれの場合も、対話的な活動を通して生徒が「操作的な見方・考え方」を相対的に自覚できるようにした点が、小学校との違いである。

以上のように、「操作的な見方・考え方」は「参照力」育成のための授業開発の指針になったわけだが、「参照力」を段階的に育成していく点において以下の課題が残された。

①発達段階を考慮しつつ系統的な学びを実現するための、要素的な言語技能の再整理

②ICT活用等の学習環境を前提とした「参照力」の再検討

①は4年間の成果の裏付けでもあるが、発達段階によって情報活用の必然性や複雑さが異なることが明瞭になった。今後はそれをふまえ改めて要素的な言語技能を再整理する必要がある。また②は、扱う情報の多様性と質を検討し対応することである。情報を活用するだけでなく、どのような情報を扱うかについても議論し、「参照力」の具体について再検討を行いたい。

注および参考文献

1. 連携研究プロジェクトの概要については、以下の3点の報告書で詳述されている。

宇都宮大学共同教育学部・宇都宮大学共同教育学部附属学校園『連携研究プロジェクト 研究概要集』2019・2020・2021・2022年度

2. 本稿で取り上げた授業実践2例は、以下で報告したものである。

・「対話的な学習活動を通して『参照する力』を育てる国語科授業の創造—『情報の扱い方』に着目して—」宇都宮大学共同教育学部・宇都宮大学共同教育学部附属学校園『連携研究プロジェクト 研究概要集』2021年度、pp.7-10.

なお、4年間に行った国語科プロジェクトの授業実践については、注1の報告書でもそれぞれ報告している。

・「対話的な学習活動を通して学びをつなげる国語科授業の創造—『情報の扱い方』に着目して—」宇都宮大学共同教育学部・宇都宮大学共同教育学部附属学校園『連携研究プロジェクト 研究概要集』2019年度、pp.5-8.

・「対話的な学習活動を通して『参照する力』を育てる国語科授業の創造—『情報の扱い方』に着目して—」宇都宮大学共同教育学部・宇都宮大学共同教育学部附属学校園『連携研究プロジェクト 研究概要集』2020年度、pp.6-9.

令和4年4月1日 受理

Development of Japanese language classes
for ‘referencing’ (ability to refer)
and information literacy through interactive learning

Kaori MORITA, Kazuaki IIDA, Mari KEMMOKU, Manato TSUNAGAWA,
Haruka KONISHI, Takaaki MAKINO, Jun YOSHIDA and Rumiko WATANABE